

マギの世界で生きていく（旧題『マグノシュタットで生きていく』）

ルクセウス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

数えきれぬ出会いと別れ、未知なる世界に隠された謎：不思議な少年フアイサルによる、筋肉と魔法の大冒険がここから始まる!!？

爽快？マジカルラブコメディー!!？

「筋肉ムキムキマッチョマンの魔法使いに俺はなる！」

※作者にとってこれが処女作です。至らない点や誤字脱字、言葉の誤用、設定の矛盾などがあれば教えていただけると助かります。

※作者は現在男子高校生なのでテストや行事などで投稿できない日が続く可能性があります。

※作者は本編の方は全て持っていますですが、シンドバッドの冒険は途中までしか持っていないです。なので、もしかしたらシンドバッドの方とは違う設定が出てくるかもしれません、そこはオリジナルってことで勘弁してください。まあ、本編の方の設定も改変するんですけど

ね！

タイトル変更しました。

旧題『マグノシユタツトで生きていく』

目次

プロローグ	1
第1話	4
第2話	7
第3話	10
第4話	13
第5話	16
第6話	19
第7話	22
第8話	25

プロローグ

やあ。俺はファイサル。(おそらく) 転生者さ。

今は、今世の母の乳で…食事をしているところさ！

「さー」じゃねえよこの野郎！だつて？

仕方ないじゃないか、正直俺もよくわかってないんだから。俺だつてついさつき急にびびっ！と来たんだよ。

いやー驚いたね、だつて起きたら目の前に肌色の

なにかがあつて、口の中になんて言ったらいいのかわからない味の液体が広がってるんだぜ？

わかるか？この気持ち…

それでちよつと落ち着いて来た今、いろいろと整理するために自己紹介をしてたつてわけさ。

とりあえず、現状確認できているのは

・自分の前世だと思われるものが頭の中にあること。

・ここで使われている言語はもしかしたら転生特典的なやつなのかもしれないが、日本語であること。

・おそらく母親だと思われる人物(めんどくさいのもう母さんでいいや)の言葉から俺の名前はファイサルだと思われること。

くらいかな。

あ、あと一つあったわ。

母さんがコスプレっぽい格好をしていて、ちよつといたいたいこと。まあ、もしかしたらこの世界ではこの格好が普通なのかもしれないけどね！

うん、もうないね！

まあ、こんな風に冷静そうにしても、内心ではうつはうはなんですけどね！いや、だって転生ですよ転生、現代に生きる日本人の夢ですよ！（自己基準）母さんの格好から、もうファンタジーであることは確定ですよ！なんか、ザ魔法使い！って格好してるし魔法は絶対あるな（確信）

これはもうチート使いまくって俺tueeeeするしかないね！

て、言ってもまだまだ赤ちゃんだしできることなんてほとんどないんだけどね！せめて3歳くらいまで行かないとやれないことが多いぞぎてね…

おそらく魔法もあるんだろうけど、よくあるへそのなんたらがどうたらとかいうのはまったく感じないし、血の流れ的な感じのサムシングもわかんないなあ…

ハッ!?もしかして俺は魔法を使えないのでは？

魔法使いは何十万人に一人のエリート様的な世界なのでは？やめ

てよ神様、そんな酷いこと言わないでえ…

剣も魔法も両方使いこなして俺 t u e e e e させてよお…

いやまてよ、剣を極めて「魔法?そんなもの切ればなんの問題もないだろう? (キリッ)」とかやるのもそれはそれでいいのでは…

まっ、そもそも魔法を剣で切れるのかとかまったくしらないんだけどね!

てか、魔法自体あるのかすら不明なんだけどね!

だが、そんなことはどうでもいい!

俺はロマンに生きるぜ!

と、そういうわけで、赤ちゃんにもできる身体作りとして、まあ寝ることから始めようかな!

「じゃ、おやすみ世界!

第1話

今日で俺も3歳！最近、白い蝶みたいなのが覚えてきました！それがなんなのか気になったので母さんに聞いてみると、「ルフ」と、言うらしい。これを使って魔法を使うんだって！この歳でルフが見えてるっていうのは魔導士の才能があるらしい。

……ん？白い蝶？ルフ？魔法？あれ、これマジの世界じゃね？

それにここ、魔法使いの国って感じだったぶんマグノシユタツトなんじゃないかな？

ラツキー……なのかな？ 名前とかしか知らない漫画の世界じゃなくて。一応マジなら全巻持ってたし……

いや、でもなあレームとかシンドリアとか紅帝国とかヤバイところいっぱいだしなあ……

できるだけ生き残るにはどうすればいいんだ？

……あ、そうだ！誰にも負けない人間になればいいんだ！（逆転の発想）

アラジンは1ヶ月間身体を鍛えただけで以前の何十倍もの魔法が使えるようになっていた。なら今から鍛えればそれ以上の成果を出せるんじゃないかな？

目標は鋼錬のアームストロング少佐みたいな肉体だな！

近くに来たらぶん殴る、遠くへ行ったら魔法を使う、なにそれ最強じゃないか！剣なんてやっぱいらねえな！時代は筋肉だよアニキ！

まあ、小さい頃に筋肉をつけようとしたりすると身体に悪いらしいし、まずは走ったりして、体力をつけるところからかな？

身体を鍛え始めてから3年位たった気がする。最近では結構体力がついてきて、1時間くらいなら全力で走れるようになってきた。

目指せ一日中全力疾走！

てか、それよりも大切なことに気づいた。原作でいうと、今はとどれくらいなのかってことだ。母さんたちがこの前、最近モガメツト様がどうたらって話をしていたし、たぶんモガメツトおじいちゃんは生きてるんだらうから、今一番偉いのはモガメツトおじいちゃんなんだろうけど、アラジンがすでに来てるのかでだいぶ変わるからなあ……

そういえば、いつかの夕飯のときに「母さんたちはモガメツト様の愛弟子なんだよ(ドヤツ)」とか言ってたな。ということは、母さんにお問い合わせすればモガメツトおじいちゃんに会えるんじゃないかな？
そこで実際に見て、老け具合を確認すれば良いし、ダメ元でいっちょ頼んでみるか！

「お母さん！僕、お母さんたちのおししょーさまに会ってみたい！」
「もう、ファイサルったら急に何言いだすの？でも、確かにそろそろモガメット様に挨拶させておくべきかしら。」

「……そうね。じゃあ、今は忙しいみたいだし、モガメット様達に余裕ができたら会いに行ってみましょうか！」

フツ、俺にかかればこれくらいチョロいもんさー！

これで今がどれくらいなのか確認できるな。俺的にはモガメットおじいちゃんはできるだけ若い方が嬉しいんだけど……

てか、若かったらモガメットおじいちゃんじゃないじゃん！モガメット………おとうさん？なんか合わないなあ。やっぱおじいちゃんはおじいちゃんじゃないと！たえ今はおとうさんなのだとしても、最終的には原作みたいなおじいちゃんになるだろうし、もうおじいちゃんでもいいや！

待っていて！モガメットおじいちゃん！

第2話

モガメツトおじいちゃんに会わせてくれるっていう約束をしてからだいたい1年くらいがたったある日、母さんが明日会いに行くよと言ってきた。

いや、なんでさ？正直もう忘れてたよ？なんでそんな急に…

え？国ができたばかりでいろいろと忙しかった？そしてそれが最近になって落ち着いてきた？

ふーん、そう…（無関心）

…って、国ができたばっか!?？おま、それ聞いたらもうモガメツトおじいちゃんに会う必要ないじゃん!!？いやでも、原作キャラには会ってみたいし、会いにはいくけどさあ!!？

そんなこんなで1日たって、やってきましたマグノシユタツト学院！いやー凄いね、外を走つてるときに見えたりもしたけど、トビラの前に来てみるとやっぱ凄い迫力だ。

なんでも、この国の前身だったムスタシア王国の王宮を魔法で造り変えたらしいんだけど、全く王宮って感じがしないなあ。

なるほど、これが魔法の力ってスゲーってことかあ。

昔の人から見た前世も、こんな感じだったんだろうなあ。

つといけないいけない、早くいかないと置いていかれちゃう。

「お母さん待ってえー…！」

いやー広かった。モガメツトおじいちゃんがいる部屋の前に来るまでに10分くらいかかったよ。それにしても緊張するなあ。原作キャラですよ。原作キャラ。もうそれだけで緊張するよね。

それじゃあ、ファイサル、逝つきまーす！

「コンコン」

「失礼します！」

「モガメツト様、本日はお時間を取っていただきありがとうございます」

「よい。それよりもその子がお主の言っていたファイサルか？」

「はい。さあ、ファイサル、挨拶するのよ」

「はっはい！えつと、僕は、ファイサル・マフデーっていいます！あなたがお母さんたちのおししょーさまなんですか？」

「なんというか、モガメツトおじいちゃんやんはモガメツトおじさんだった。微妙に若い感じ？あと、モガメツトおじいちゃんのトレードマークである鼻あたりにあるあの黒いやつはまだないようだ。」

「ああそうだ。私が君の両親の師匠であるマタル・モガメツトだよ」

「えつと、モガメツト…おじさん？」

「こら！ファイサル、何言ってるの！早くモガメツト様に謝りなさい」

「よいよい。そうだね、私のことはモガメツトおじさんと呼ぶといい。ああそれと、私にも君と同じくらいの娘がいる。できればあの子とも仲良くしてやってほしい」

「えつと？？ロリヤムさんいんの？マジで？やったぜ！」

「えつと、あの、わかりました！」

「ああ、ありがとう。それでは、私はこれから君の母親と話があるから、そうだね、隣の部屋に娘がいるから、一緒に遊んでいるといい」
「ファイサル、ちょっと長くなっちゃうかもしれないけど、大人しくしているのよー！」

「ホッホッホッ、子供は少し元気なくらいが丁度いい」

「そうですね！モガメツト様！」

「え？母さん、手のひらドリルなの？簡単に意見簡単に変えすぎじゃない？」

「では、そういうことで、そろそろ行くといい。さらばだ、ファイサルよ。また遊びに来るといい」

「はい！失礼しました！」

ふう、まったくいい子のフリは疲れるぜ。まあ、そんなことどうでもいい、重要なことじゃない。そう！大切なのはロリヤムさんがいるってことだ!!？

では、隣の部屋へレッツゴー!!？

第3話

そこそこ遠いな、隣の部屋あ！おじいちゃんの部屋は一番奥だったから別に迷ったりはしなかったけど、なんで20秒くらいかかるんだよ!?!? 確かにおじいちゃんの部屋に入った時に、内心、広さに驚いたりもしたけどさあ。これもしかして、ヤムさんの部屋も同じくらい広いの? てかここ学校でしょ? なんでこんなに広い個人の部屋があるの? おかしくない? しやーない、部屋に入ったらヤムさんに聞いてみるか:

ということ失礼しまーす。

〃ゴンゴン〃

「失礼しますー!」

部屋に入るとそこには、おそらくヤムさんだと思われる、とても可愛らしい女の子がいた。

「えつと、あなたがモガメットおじさんが言っていた娘さんですか?」

「ええ、そうだけど、あなたは誰?」

「あつ、僕はファイサル・マフディーって言って、お母さんがおじさんの弟子で、今日は挨拶に来ただけど、お母さんたちはなんかお話があるみたいで…」

「ふーん、そう。それでこの部屋にいるように言われたのね。ま、いいわ。それじゃあなにかやりたいことでもある? あ、あと別に敬語は使わなくたっていいわ」

「えーと、ならなんで学校なのにこんなにおっきい個人の部屋があるのか教えて!」

「えつと、この部屋って大きいのか? その、私ここからあまり出ることがないからよくわからないんだけど…」

「すごく大っきいよ! 僕の部屋の倍くらい広い!」

「そんなに!?!? こんな近くにも知らないことがあつたなんて: あ、それで、なんで学校内に部屋があるのかよね。それはね、この学校に建て替える時に、お父さんの弟子たちが「モガメット様はここに住むべきだー」って言ったかららしいの。その時お父さんは断ったらしいん

だけど、珍しく弟子たちが意見を变えなかったら、珍しくでた弟子の頼みだし、それくらいなら叶えてやるかってこの部屋を作ったんだって！」

へー、確かにここって王宮だったらしいから、一番尊敬する人に住んでもらいたいって思ったりしたのかな？

「へー、そんなことがあったんだ。なんでなんだろうね？」

「知らないわよ、そんなこと。それよりも、次はあなたがなにか話さない。そうね、私はこの学校の外がどんななのか気になるわ！」

「えーと、そうだね…」

〃ゴンゴン〃

「ファイサル、いる？そろそろ帰るわよ」

「つと、もうそんな時間みたい、そろそろ行かないと」

「そう…ふふ、ファイサル、あなたを私の友達1号に任命してあげるわ！」

「ツ！うん！嬉しいよヤム姉ちゃん！ありがとう！」

「ふん！もちろんあなたの友達1号も私よね？」

「もちろん！じゃあ、また遊びにくるよ！またね！」

「ちゃんと来なさいよね！またね」

はは、今日は充実した1日だったな。モガメツトおじさんとも会えたし、ヤム姉ちゃんとも仲良くなれた。それに、今世初の友達ゲットだぜ！それにしても、ヤム姉ちゃん可愛かったなあ。絶対また会いに行こ。次はなに話そうかなあ。

それはそうと、そろそろ筋トレも始めようかな？流石にもういいでしょ。それに世界が違うんだし身体の構造も違うかもしれないしね！

べつ別走るのに飽きたってわけじゃないし。走るのも続けるし。最近は一時間半くらいなら全力で走り続けられるようになってきて普通に楽しいし。

…嘘じゃないよ！

将来魔法論文とか書く時に困るんじゃないかねえの？って言ったら、結構良かったらしく、真面目に字を書く練習をするようになった。その結果、3年のテストは見事、合格することができた。

そんなこんなで俺は、ヤム姉えと一緒に高等部に行くことになったのだ。正直、ヤム姉えには悪いが、1、2年の時に落ちていてくれて良かったと思っている。だって、そのおかげでヤム姉えと一緒にいられる時間が増えるんだから。

高等部になる際、魔法のテスト的なやつをやった。なんでも、その結果でクラスを分けるのだとか。そのクラスをコードといい、1から6まであって、コード1が一番良いらしい。で、その分け方というのが体内の魔力量マゴイと魔法の出力で決めるらしい。ちなみに、俺の魔力量はかなり多いらしく、上級魔導士の中で見ても上の中くらいあるらしい。けど、ヤム姉えはそれ以上に多いらしく、上の上くらいあるんだとか。それを言われた時、かなり自慢された。悔しい…。まあ、魔法の出力に関しては俺の方が圧倒的に上だったけどな！舐めんな！こちらら3歳の時から身体鍛えてんだよ！ああ、俺、頑張ってきた良かった。やめたくなくなった時もあったけど、続けてホント良かった。めっちゃ自慢した。めっちゃ悔しがってた。

そんなことがあったりもしたが、2人揃ってコード1に行けて良かった。俺たちは、2期生という扱いになるらしく、授業マレシッの予定表だけ配られて、授業は来月かららしい。それまでは、別の場所で1月分の授業を教えてくれるらしい。まあ、それもしょうがないか。速攻で合格したといっても、審査とかで2週間くらい掛かっちゃったし。

そんなこんなで、俺たちは半月の間、2人で授業を受けた。内容は、マグノシユタットでは魔法を8つに分けているだとか、自分と相性の良い魔法がなんなのかだとか、魔法は満遍なく使った方がいいだとか、そんなことをやった。ちなみに、俺と相性が良かったのは、力の魔法だった。8つの区分で言うと7型。魔法を使った時に目の色が橙に見えることから☒橙魔導士☒とも呼ばれるらしい。ヤム姉えと相性が良いのは水の魔法で、区分で言えば2型、目は青色に見えるらし

い。

まあ、いろいろなことがあったが、今日から俺たちは高等部だ！いろいろな人と出会って成長していくんだ！

「おはよう諸君。今日からこのクラスに加わるヤムライハとファイサルだ。それでは諸君、励めよ」

「えっ!!?教官、今日はなにやるんですか!!?」

「む?ああ、言っていないなかつたな。今日からは各自自習だ。必要なことは先月の間に教えた。後はそこから自分で発展させろ。使いたい物や場所がある場合、その前日までに申請しろ。大体通る。一月後に試験があるが、そこである程度の結果を出さなければ退学もあり得る。せいぜい頑張りたまえ。では、私にも研究があるのでな。」

ええ…

第5話

無事、2年に上がる事ができた。コドル1以外は進級できないらしいが、楽勝だった。というか、ずっとコドル1だったのでなんの問題もなかった。6回あった試験に関しては、俺は『砂人形の生成』という魔法を使った。1回目の試験では、力魔法で形を作り、次の試験では光魔法で外見を整え、その次では熱魔法で体温を与えた。その次では生命魔法で意思を与え、その次では音魔法で話せるようにし、最後の試験ではそれを複数作った。命令式で言えば1000を超えろ。これは、かなり難しいことらしいのだが、案外簡単にできた。なんとというか、こういうものがやりたい！って思いながらやると、ルフがその通りのをやってくれるのだ。そのおかげで、難しい魔法でも、魔力さえあればできるんだ。

ちなみに、ヤム姉は『水鏡の蜃気楼』という鏡みたいにものを映す、熱魔法と水魔法の融合魔法を使って試験を受けていた。命令式で言うと100を超えないが、それでも、いつもなら首席を楽勝で取れると言えば俺の異常さがわかるだろう。∴転生チートかな？まあ、俺が不利にならないのならそれでいいか。

そんなこんなで、俺が首席、ヤム姉が次席で進級することになった。めっちゃや自慢した。めっちゃ悔しがってた。

え？試験の時以外は何してたのかって？そんなの、魔法を作ったり、筋トレしたり、魔法の特訓をしたり、走ったり、ヤム姉と話したり、筋トレしたり、ヤム姉と遊びに行ったりしただけですけど？いやー、あの時のヤム姉は可愛かったね、何にでも興味津々でさ。ただ、最後にちよつと悲しそうな顔してたのが気になったけど…

そんなことがあったりもしたが、最終試験の次の日、俺たちは闘技場に向かい合っていた。なんでこんなことになっているのかというと、なんでも、実践試験とかいう試合みたいなのをして、魔法の方向性や実力を見て、上級魔導士が欲しい生徒に研究室への推薦状を送るらしい。まあ、そんな事情があり、本気でやれということなのだとか。

ヤバくなったら先生たちが止めてくれるらしいが、たとえば試合であったとしても、俺はヤム姉えを傷つけたくない。そんなことをすれば、ヤム姉えの敵になってしまったみたいだから。

まあ、手加減なんかすればヤム姉えガチで怒るし、今後こういうことが無いとも言い切れないから本気でやるんですけどね！

そんなこんなで始まった試験だが、最初は『光線』や『雷電』、『空気の壁』と言った単純な魔法の撃ち合いだった。まあ、打ち消し合うだけなので意味なんてないのだが。

「ふふ、ファイサル、その程度なの？」

「ハッ、そう言うヤム姉えだって一発も当ててないじゃないか」

「あら？良いのよ私は。このまま続けても体内魔力量の差で勝てるのだから」

全くもってその通りだ。だからこそ、魔法を組み合わせさせて勝つしかない！

『砂人形の生成』ッ！

「あら、それ、最終試験の時に使ってたやつじゃない。何？目眩しのもり？でも、そんなもの意味ないわ！だってその魔法、水を使ってるんでしょ！なら、水を感じすれば良いだけよ！

…そんな?!？なんで水を感じできないの?!？」

「二」今回のこれは特別製さ！そんな簡単な方法でわかつちまうもの実践で使うわけ無いだろ！今回は、水魔法も使って、体内までしっかり再現してるのさ！それに、これは目眩しなんかじゃない！

『共鳴拳』！「二」

これは音魔法と風魔法を融合させたもので、自分の拳の周りの空気をすごい速さで振動させることで、すごい破壊力を生み出す俺の得意魔法だ！

作り出した砂人形とともに、ヤム姉えに全方位から殴りかかる。何体かやられたりしたが、本体の俺がやられていないのなら、なんの問題もない。そんな感じで接近しつつ、ヤム姉えの『防壁魔法』を殴っていく。20発くらい殴ったところで『防壁魔法』にヒビが入った。

それには流石のヤム姉えも焦ったのか光魔法で目眩しをしつつ、力魔法で空を飛ぶ。それをされてしまうと今の俺ではキツイものがある。流石にこの人数を飛ばすのはキツイのだ。

「あら？どうしたの？飛んでくればいいじゃない。飛ばせるのならだけどね」

「ハハツ、気づかれたか。その通りさ。まあ、人数を減らせば飛べないことはないけど、それじゃつまらないからね」

そう言っつて俺は魔法を解く。その後、熱魔法、水魔法、力魔法の3つを、凝縮し、混ぜ合わせる。

「ッ！あなたまさか、超律魔法を使う気!?？」

「ハハツ、避けないと怪我しちゃうよ！」

「いいわ、そっちがその気ならこっちだつて！」

デストロクシオン

『大閃光』 ツ！

アイニフ・ダツフク

『激流』 ツ！

その後のことは覚えていない。聞いた話によれば、衝撃で両方とも倒れ、引き分けになったらしいが。

クツソー、勝てなかった。完全に勝つつもりで行ったんだけどなあ。よし！次は勝てるよう、今まで以上に努力するぞ！具体的には1.5倍くらい。いやー2倍は（時間的な意味で）キツイっす。

ちなみに、怪我治りヤム姉えと再会した時に「次は絶対勝つ！」と言われました。

第6話

今、俺の机の上には大量の推薦状がある。正確に言うとも16枚。その中でも興味があるのは『空間転移の可能性』『魔法生物学』『ジンの研究』の3つだけなのだが。どうしよう、本当に迷う。どれも面白そうだしなあ。空間転移は普通に便利だろうけど、ルフに頼めばやってくれそうだし、魔法生物学はロマンがあるけど、そんな感じの金属器があつた気もするし、そうすると一番よくわからない『ジンの研究』かなあ。：よし！『ジンの研究』にしよう！

あ、そういえば、ヤム姉えは何にしたんだろう。俺よりは少なかつたけど、それでもかなりの枚数貰つてたし。

「ヤム姉えは、どの研究室にしたの？」

「ん？私？私は『2型魔法高度使用術』って研究室にしたわ。そういうファイサルはどこにしたのよ」

「俺は『ジンの研究』ってどこにしたよ。ていうかヤム姉え、ホントに水魔法好きだよね」

「いいじゃない水魔法。使いやすいし、失敗してもケガしにくいし。：それに、水魔法が初めてファイサルと一緒に作った魔法だったんだもん」

ヤム姉え、聞こえていますよ。小さい声で言ってもこの距離なら普通に聞こえるだよお！恥ずいやん！めちやくちや恥ずかしいじゃん！どうすりゃいいんだよ！聞こえなかつたふりをすれば良いんですかねえ!!？：はあ、落ち着こう。よし、聞こえなかつたことにして話を続けよう（この間0.4秒）

「：なるほどね。まあ、そういうのも良いんじゃない？」

なんで少し残念そうな顔してるんですかねえ!!？反応して欲しかったの!!？

「キーンコーンカーンコーン←キーンコーンカーンコーン→」

あ、チャイム（的な魔法道具）が鳴っちゃった。早く先生にどの研究室にするかのプリントを提出しないと。

研究室を決めてから3ヶ月くらいが過ぎた。研究室での内容を簡潔に言ってしまえば、「現状では一瞬ジンを形造ることはできるけど、すぐにただのルフに戻ってしまう」というものだったが、正直、思ってたのと違った。俺としてはもっとうダンジョン的なものに住んでて、そのダンジョン的なのを制覇すると金属器に宿るやつについて、どうのこうの言ってくれるのを期待してたんだけどなあ。そっかあ、作る方かあ。うん、それ魔法生物学とどう違うの？

まあ、そんなことは置いておいて、それ以外にやったことと言えば、転移魔法を試してみたってことかな。これに関しては、意外にも成功したんだよね。まあ、あれを成功と言って良いのかは別だけど。転移すること自体はできたんだよ。でも、それがホント短距離でさ、10メートルあるかないかくらいなんだよね。しかも、それで魔力がすっからかんになっちゃたし。これもうマジって言われるような存在にしかできないんじゃないの？

あとは、ヤム姉えと遊びに行ったり、筋トレしたり、ヤム姉えの誕生日のお祝いにネックレスを渡したくらいかな？

そんなことがあったりもしたんだけど、今日は大講堂に呼び出されてるのだ。なんでも、今日から数日は、この大講堂で歴史の授業をするらしい。この国の成り立ちとかを話すんだとか。

“キーンコーンカーンコーン←キーンコーンカーンコーン→”
つと、授業が始まったな。うお！歴史の授業はモガメツトおじさんが直々にやるのか。珍しいな。

くくく大体原作17巻の最初の方の内容と一緒くくく

ふーん、そう（無関心）正直、どうでもいいかなって。ただ、外での魔導師の扱いみたいなのが知れたのはラッキーだったかな。あと

は、王族とか貴族の話をしていた時に、モガメットおじさんがヤム姉えの方を見て、ほんの少しだけ顔を歪めたのは気になったかな。本当に少しだったから見間違えかもしれないけど。

そんなこんなで、2年生も過ぎていった。

はい！というわけで、今日は卒業式！卒業生はそれぞれ、自分の学院生活の集大成とも言える魔法を披露するんだ！ちなみに俺は、ラーメルダーミヤ・シヤツカル『砂人形の生成』を応用して、砂でマグノシユタツトを創り、この先していくであろう変化を光や熱、音の魔法を使って表現した。流石にこれは疲れた。

そんな感じで卒業しました。

第7話

マグノシユタット学院を卒業してから1年くらいが経った。今でも、身体作りは続けている。体力についてはかなりのもので、全力で走り続けても6時間は走れるようになった。その時は、時間的にそれ以上走るのにはキツかったのでやめたが、まだかなり余裕があったし、あと1時間くらいなら全然走れたと思う。あとは、筋トレも続けているんだが、なかなか筋肉がつかない。というか、細マッチョみたいにはしかならない。クツ、俺はアームストロング少佐にはなれないと言うのか！

☒ファイサルよ、コードギアスのスザクのようになるのです…生身で地面に垂直な壁を走り、マシンガンを避けられるようになるのです

…☒

…ハツ!??なんか今幻聴が…

生身で壁を走るとか…化け物かな?

まあ、筋トレが無駄になることはないと思うから続けはするんだけど。

ハツ!??なんか今すぐ門に行かなきゃ、めちやくちや後悔する気がする!というわけでレッツツゴー!

ヴェツ!??あれはヤム姉え!??なんでここに!??ってなんか出て行こうとしてるし、えっ!??えっ!??

と、とりあえず、偶然会った風を装いつつどこに行くのか聞こう!

話はそれからだ!

「ん?あれ?ヤム姉え、どこに行くの?」

「ツ!??」

話しかけた途端、ヤム姉えは驚きながらも逃げ出そうとする。まあ

もちろん、いつも鍛えている俺から逃げられるはずもなく回り込めるのだが。

「ヤム姉え待つてよ！俺なんかした？なんで逃げようとするんだよ？」

「うるさい！あんただって、私をのこと利用しようとしてるんでしょ！どっか行つてよ！」

「なんのこことだよ!?？そもそも利用するつてなんだよ!?？ちゃんと話してくれなきゃわかんねえよ！」

なんかわかんねえけど、すげえ興奮してるな。とりあえず生命魔法で落ち着かせるとして…

「…話してくれなきゃ、どうにもなんないからさ。お願いだから、話してくれないか？」

「うう…あんただって…あんただってえ…」
(めっちゃ人集まって来てるな。とりあえず移動するか)

「ヤム姉え、とりあえずここから離れよう。ここじゃいろんな人に見られちゃうし、そんなようなところにする話じゃないんだろ？」

「…わかったわよ。それと、移動するのなら外に行かせて」
「まあ、話してくれるならどこでもいいよ」

そんな感じで、外に出てきたわけなのだが、初めてだな、マグノシユタツトの外にでるの。外はこんな風になってたのか。マグノシユタツトはでっかい壁に囲まれてるから外とか見えないし。

「ヤム姉え、そろそろ話してくれないか？利用するつて」
「…あなた、私が養子であることは知ってる？」

「ああ、知ってるけど」
「そう。なら、私が養子になる前は、どこの子だったのかは？」

「えーと、あれ？そういえば知らないや」
「…私ね、本当はムスタシア王国の貴族なんだった。それもかなり高位の」

「えっ!?？ムスタシアってマグノシユタツトの前身の？」

「そのムスタシアよ。それで、モガメツトは私をそこから攫つて育てたのよ。そのことを知ったら、何かに利用するためなんじゃないかつ

て、なんだか怖くなっちゃって。でも、ごめんなさい。よく考えたら、あなた、その時には産まれてなかったものね。そんなあなたが、なにか関係してるはずがないのに。それなのに、あなたにまで当たっちゃって。本当にごめんなさい」

「ああ、謝ってくれたならいいよ」

「ありがとう、ファイサル。それじゃあ、私もう行くから」

「えっ!??行くってどこにだよ?」

「私、もうこんな国にいられないわ。だから、この国から出て行くの。じゃあね、ファイサル。」

さよう「なら! なら、俺もついてく! たとえ、ヤム姉えが許してくれなかったって勝手について行く!」

「どうしてよ!?? どうしてそこまでして、私に関わろうとするのよ!?!」

「だって俺は! ヤム姉えのことが! 好きだから!!? 大好きなんだ!!? ヤム姉えのことが! そんな人が悲しそうな顔をしているのならなんとかしたい。どうにかできるのかなんてわからないけど、そんな状況で別れたくない! だから、俺にも一緒に行かせてくれ!」

「...そこまで言われたら、いいって言うしかないじゃない」

「ありがとう、ヤム姉え」

そんな感じで、マグノシユタツトから出て行くことになった。

あとで、父さんと母さんには手紙を書いたとこ。手紙くらいなら転移魔法で部屋まで飛ばせるし、なにも言わずに出て行ったこと謝らなきゃ。

第8話

マグノシユタツトを出てから3時間くらいがたった。最初は、特訓として走ろうかとも思ったのだが、服が今着ている一着しかないので流石にやめて、普通に歩いている。なお、ヤム姉えは魔法で飛んでいゝ。そんなんだから、たまに歩いたりするとめっちゃ疲れるんだぞ。

ちなみに、今は街を目指している。というのも、俺はヤム姉えを追って着の身着のまま来たので、持っている物はいつも持ち歩いている物くらいしかないし、ヤム姉えはヤム姉えで、バレずに出て行くために必要最低限の物しか持って来ていない。つまり、いろいろと足りていないのだ。

お金に関しては問題ない。常日頃から、杖代わりとして各属性に合わせた宝石を8個持っている。本当は、ちゃんと加工して杖の形にした方が効率がいいのだが、俺は肉弾戦もするため、宝石のような握った状態で殴りやすい物の方がいいのだ。なので、あまり使わない属性の物を2・3個ほど売ってしまえば、ある程度の金になる。それだけあれば、服とか食料とかを買う分には十分だ。

そんなことを考えたり、ヤム姉えと話したりしながら歩いていくと、結局、新しい街に着くまでに4時間（合計7時間）かかった。マグノシユタツトを出たのが昼ごろなので、既にまわりは暗い。そんな状況なので、とりあえず宿を取り休むことにした。え？金はどうした、換金してないだろ？だって？

いや、1日泊まれるくらい金は常備してるよ？父さんも母さんも帰ってこない冬の日には家の鍵を忘れて、一晩中外にいることになったのがトラウマで…え？魔法を使えって？寝ている時にどうやって魔法を使えと…それとも住宅街で火でも起こせと言うのかね？

まあ、そんな感じでちゃんと自分で払いました。

そして普通に寝ました。「部屋が1つしか残っていません」みたいなイベントも起きなかったしね。

そんなこんなで今は朝！

ヤム姉えも眠そうな感じはしないし、ちゃんと寝れたみたいでよかったよかった。

まあ、その後は普通に換金して、普通に食事して、普通に買い物しただけだった。その最中に、ここはミステイア共和国のハクールという街だということを知った。あと、最近近くにダンジョンができて、人が増えてきているのだとか。

ダンジョンという言葉を知って、心踊らない男の子はいません（自己基準）しかも、ダンジョンをクリアした者には財宝が与えられるのだとか（噂）それに、ヤム姉えもヤム姉えで、ダンジョンなんていう不思議なものに興味津々みたいだし、これはもう行くしかないよなあ？

というわけで、ダンジョンの場所を聞き、準備を整えたら、レッツゴー！

ダンジョン前に着きました。道中はなにもなかった：ツマンネとりあえず、ダンジョンを外から見た感じだと塔みたいな感じだ。外装におかしな所はない。ただ、所々土が付いていたりして、本当に地面から生えてきたんだなと思わせる。あとは、入り口みたいな所に、光の幕みたいなのがあり、それを見るたびに、俺の第六感が危険だという信号を発する。なあに急に怖がってんですかねえ？

もう外から見てわかることはなさそうだから、（ヤム姉えと手を繋いで）光の幕に歩み寄って行く。そして俺たちは、光の幕に触れた瞬間浮遊感に襲われた。